

所属・資格 心理学科・教授

申請者氏名 内藤 佳津雄

研究課題		高齢者の意思決定と情動・共感性の加齢効果に関する研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>老年期には快感情を向上させるような目標や活動を選択する志向が生じるという社会情動的選択理論によれば、情報選択や記憶の想起におけるポジティブ効果が生じると考えられている(Castensen & Mikels,2005)。本研究では、こうした高齢者の情動・共感性等の特性と認知機能の関係に関する研究をレビューして、高齢者の情動や共感の加齢効果についての研究成果を明らかにするとともに、高齢者の意思決定における認知機能および情動・共感等の影響についての研究課題を明らかにすることを目的とする。</p> <p>本年度の研究としては文献的研究と高齢者と対照するための若年から中年の人に職業的な意思決定に関する調査結果の入力・分析を行った。</p>
	研究の結果	<p>意思決定に関する研究で用いられる Iowa Gambling Task(IGT)では、中高齢者(56~85 歳)は、若年群に比べ長期的に損失を生みやすいカードを選択しやすく、中高齢者は若年者よりも目先の利得に惑わされやすいことが示唆されている。この現象は短期的にポジティブな情報への選択性の高さを示すものと解釈可能だが、意思決定を支えるミクロな認知機能に目を向けるといくつかの見解が存在する。</p> <p>注意に関する研究としては、様々な表情を提示した場合の視線の方向性を指標に検討した研究では、高齢者では、ポジティブ感情を示す表情への注意の方向性の偏りが認められている。これはポジティブ情報への情報選択の偏りがあることを示唆している。</p> <p>記憶研究においては、高齢者では記憶した材料のうちポジティブな情報について再生・再認成績が良い結果が示されている。この結果もポジティブ情報への注目や処理によって生じるものと解釈できる。しかし、高齢者はネガティブな情報への処理が抑制される傾向があることを示した研究結果もある。例えば、不快な刺激による不快感情の生起後にワーキングメモリー課題を行うと課題成績が低下するが、高齢者は低下が少ない結果が示されている。また、高齢者は感情的な刺激の処理中の脳内の活動を検討した研究では、ポジティブ促進効果は高齢者の意図的な感情制御を反映し、ネガティブ情報の影響を抑制できることを示唆する研究成果もあった。</p>
	研究の考察・反省	<p>高齢者における目先のポジティブさに惑わされた選択は全高齢者に生じるので花なく、研究によって異なるが 15~35%程度であることが指摘されている。したがって、ポジティブさへの着目されやすさ(真のポジティブ促進効果)とネガティブさの制御や耐性(ネガティブバイアスの低下によるポジティブ促進効果)の両面に着目した理論と実証的研究が望まれる。また、実験的研究によって小集団における潜在的な特性を明らかにするとともに、顕在的・行動的側面に限られるが、大規模調査によってその出現率の推定等をしていくことも必要であろう。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>なし</p>	